

はじめに

平和主義や平和運動は、第一義的には「戦争に反対する」ものであると受け止められるが、これまで必ずしも世界的に共通の理解があるわけではなかった。「平和」の定義そのものが世界の各地域や時代ごとに変化するものであり、なおかつ戦争のあり方が変容するのともなって平和主義や平和運動のあり方も変わってきている。また国家や社会と個人との関係性によっても変化する。そのため平和運動の変化からは、社会のあり方の変化を見ることができる。

本書はこうした平和主義と平和運動の変化を歴史的に追うものである。とくにドイツの例に焦点を当てる。1871年のドイツ帝国(第二帝政)の建国以降、ドイツは第一次世界大戦、第二次世界大戦と2度の戦争に敗北し、世界の戦争と平和に関する議論の中心にあった。そのなかで平和に関する言説や活動はどのように変化してきたのか。これが本書の最も重要なテーマである。

分析の対象となるのは、左派の知識人を中心とした平和主義者の言論活動や社会運動であり、とくに両大戦間期に当たるヴァイマル共和国期の左派のフォーラムでもあった週刊誌『ヴェルトビューネ』(世界舞台)と『ターゲ・ブーフ』(日記)を取り上げる。平和の問題が最も反映されやすい外交と国際関係の記事から、彼らの平和主義のあり方を分析する。権力(政治力)を持たず、ペンと言葉で社会に向き合った平和主義者は、平和のために何を語ったのだろうか。彼らの議論は日々のジャーナリズムのなかで行われたものであり、必ずしもなにかしら一貫した哲学的な思考のもとで書かれたものではない。そうではなく、刻々と変化する政治状況に対応しながら、その言論を通してドイツという国や平和主義、平和運動に向き合っていたのである。こうした平和主義者の姿と19世紀末から100年以上の平和運動の歴史のなかで繰り返されてきた平和に関する議論を知ることにより、現在の平和の問題にわれわれが日々どう向き合っていくかを考察することが可能になるだろう。

本書の構成は以下の通りである。序章では、本書の中心となる『ヴェルトビューネ』と『ターゲ・ブーフ』の特徴を明らかにし、ヴァイマル共和国期の

平和主義的知識人を取り上げる意味を示す。第1章ではヴァイマル共和国期の平和主義の特徴を明らかにし、当時の外交がどのように展開したかを踏まえたうえで、主要平和団体の活動を追い、さらに平和運動と各政党との関係を明らかにする。続く第2章では両誌の外交記事の分析を行う。国際連盟やフランス、ソ連との関係、ヨーロッパ統合運動、あるいは東アジア問題など、当時の国際問題を彼らはどのように分析し、記事にしていたのか、そこに彼らの平和主義がどう反映していたのか検討する。そして第3章でヴァイマル共和国期の平和運動が抱えていた問題点を明らかにし、衰退の原因を探る。最終章となる第4章では、ヴァイマル共和国期の運動とは異なる形で行われた第二次世界大戦後の平和運動を概観する。1945年以降の平和運動の中心は反核運動である。これらを20世紀の歴史として振りかえることで、平和運動が遂げてきた変化を捉え、平和主義と平和運動がどうあるべきものなのか、検討の材料を得たい。